

銭形平次捕物控

二本の脇差

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、大変なものを拾つて来ましたぜ」

八五郎のガラツ八は、おやゆびまむし 拇指を蝮にして、自分の肩越しに入口の方を指しながら、日本一の突き詰めた顔をするのでした。

「何だ、八、小判か、銭か」

銭形の平次は置き炬燵ごたつに尻を突込んで黄表紙を拾い読みしていたのです。

「そんな物じゃねえ、人間ですよ、親分」
ガラツ八の真剣さ。

「夜鷹よたかなんか拾つて来やがると、勘弁しねえよ。薪まき雜棒ざつぼうで向むこう脛すねをかつ払つて、西の海へ叩き込んでやるから」

荒つぽいことを言いながらも、平次はニヤリニヤリと笑つていたのでした。

「そんな代物しろものとは訳が違う。ね、親分、ちよつと逢つてやつておくんなさい。永代えいたいから身を投げそうにしているのを、一生懸命なだ宥めすかして、ここまで伴つれて来たんじやありませんか」

「女か、男か」

「両方で」

「何？」

「相対死あいたいじに（心中）のやり損ねですよ、親分」

「つまらねえものを拾って来やがったものじゃないか、そいつが知れると、日本橋の袂たもとに曝さらされる代物だぜ」

心中のやり損ねは日本橋の高札場の下に三日も生き恥を曝された時代です。

「日本橋の高札場なら我慢も出来るが、鈴ヶ森の処おし刑台おきに曝されかけているんだそうで」

「何だと？、八」

「こいつは拾いものでしょう」

「フーム」

平次は炬燵から這はい出しました。奥も入口も狭い狭い家、膝い行ぎ寄りつて、いきなり障子を開けてみると、サツと路地を吹き抜く風

が、まともに平次の額を叩きますが、入口の格子は銀鼠ぎんねずみ色に月光に開け放たれたまま、そこには心中の仕損ねどころか、季節物の恋猫の片割れも見えません。

「八、誰も居ねえぜ」

「そんなはずはないんだが——」

平次の後ろから八五郎、格子の外を月に透かして仰天しました。

「あッ、居ねえ」

てめえ

「手前、永代から水死人の幽霊でも拾って来たんじゃないね」

平次の声は少し怪談調子になりました。

「脅かしちゃいけない、確かに足は二本ずつありましたよ」

ええもの

「怪物は足ぐらい融通して来るよ、——その辺の畳が濡れてい

るかも知れねえ」

「親分」

八五郎も蒼あおくなりましたが、それより驚いたのは、お勝手元で働いていた若い女房のお静でした。思わずキヤツと悲鳴をあげると、濡れた手も拭かずに茶の間へ飛込んで来たのです。

「何て騒ぎをするんだい。幽霊よりお前の声の方がよっぽど虫の毒だぜ」

平次はもうケロリとして笑っております。

「だって怖い話をするんですもの、私はもう——」

お静は胸を押さえておりました。

「親分が悪いや。つまらねえ事を言つて、脅かすんだもの。畳な

んか濡れているものですか、——心中仕損ねの二人が、ここまで
はあつしと一緒に来たが、錢形の親分の家と聞かされて、驚いて
逃げ出したんですよ、馬鹿馬鹿しい」

ガラツハは漸く常識ようやを取戻すと、二人の人間の紛失に理由を付
けました。

「それほど先が見えるなら、何だつて格子の中へ入れてから、俺
を呼出さなかつたんだ。話の様子じゃ、だいぶこんがらかつた筋
のようじゃないか」

「驚いたね、親分。まさか心中の仕損ねが、逃げ出そうとは思ひ
ませんよ」

「相手の素姓が判っているのか」

「嘘か本当か知らないが、一と通りのことは訊きましたよ」

「そんなら、あわてるにも及ぶめえ、ここで経緯いきさつを話してみな」と平次。

「そんな事をしているうちに、また心中のやり直しをしませんか、親分」

「永代からここまで来るうちに、寒さが骨身に徹こたえるよ。もう一度ドンブリやらかす気にはなるめえ、北風がいい意見だよ」

「へエ——」

「外ほかの理由わけがあるならとにかく、相対死あいたいじにの仕直しをやらかす陽気じゃねえ、たいがい大丈夫だろう」

と平次は呑込み兼ねたガラツ八のために註を入れました。

「でしうか」

「死にたがつていたのは男かい、女かい」

「女の方で」

「男の方は」

「あまり氣の進まない様子でしたよ」

「それじゃ大丈夫だ、男が死ぬ氣になると、女を引摺って行くが

——」

「ヘエ——」

「ところで、二人はどこ誰だったんだ」

「坂本町の丸屋の娘と、町内の専次とかいう若い男で、建具屋の息子だそうで」

「何？ 丸屋？ あの日本橋の坂本町のか？ そいつは大変だ、

昨夜女主人のお米よねが殺されたじやないか」

「その養い娘のお夏が、青物町の久三郎きゆうざぶろう親分に親殺しの疑いで縛られそうになって飛出したんだって言いましたよ」

「行ってみよう、八、話は歩きながらでも聴ける」

平次は煙草入を腰に、——夜風の寒い路地へもう飛出しており
ました。

「待つて下さい、親分」

続く八五郎、——そんな事には馴れたお静ですが、この晩ばかりは泣き出しそうな顔で二人を見送っております。——万一晝が濡れていたらどうしよう——そんな事を考えていたのでしよう。

二

話は一と晩前の事件に戻ります。

日本橋坂本町に、二十年前に死んだ夫の仕事を承^うけ継いで、大きな一代身上を築き上げた、女金貸の丸屋お米というのが住んでおりました。

脂ぎって、精力的で、ちよつと見は四十七八でしたが、——もうすぐ五十五だから——と口癖のように言っていたのをみると、たぶん五十四だったでしょう。とにかくにも、自分の歳のサバを読むような、生優しい女ではなく、冷酷で、押しが強くて聡明^{りこう}で、強慾^{ごうよく}で、高利貸に生れ付いたような、逞^{たくま}しい心の持主でし

た。

そのお米が、あまり立派でない——實用一点張りの殺風景な二階で、一刀の下に刺し殺されていたのを、お米の遠縁で、二三年前から居候している茂七もしちという三十男が見付けたのです。

ところで、その見付けようがまた、恐ろしく變つておりました。ガラツ八の言葉で説明すると、

「居候の茂七が、あんまりひどい小言を食らった上、その晩にも追出されそうなので、お米を脅かすつもりかなんかで、質物の脇差のうちから、一番よく光る大ナマクラを持出し、そいつを拔身ぬきみのままブラ下げて、二階で帳合せをしているお米の部屋へ飛込むと、——肝腎のお米は一と足先に入った曲くせもの者に刺し殺されてい

「たんだそうです」

「なるほどそいつは変っているな、——曲者はどうしたんだ」

「茂七は逃げて行く曲者の後ろ姿をチラリと見た——と言います
が、二階は四室まもある上、廊下あかりに灯がないから、男か女か、それ
さえ判らなかつたそうです」

「青物町の久三郎兄あにい哥は、茂七を挙げなかつたのかい」

「茂七の持っていた脇差には毛ほどの汚点しみもないが、お米婆さん
の傷は、左貝殻骨の下から、胸まで通るほどの凄い突きで、茂七
の持っていた、大ナマクラなんかじゃ、綿入れ一枚通すのもむつ
かしいと言うんだそうですよ」

「フーム」

「青物町の親分は、一番先に養い娘のお夏に目を付けました。お夏はお米の姪^{めい}で、手塩にかけて育てた娘ですが、近頃町内の建具屋の倅^{せがれ}の専次と出来てしまい、人橋を架けて、嫁にくれるか、婿に入るか、どちらでも構わないから添わせてくれと申込んだが、お米婆アいつかな聴き容れません。母親の目を盗んで、大それた約束なんかする相手とは、私の眼の玉の黒いうちは、一緒にすることはならねえと」

「……………」

「お米婆さんの眼の玉が白くなると、下手人の疑いは一番先にお夏に掛る道理じゃありませんか」

「専次は？」

「その晩尺八の復習で、丸屋の隣の竹支齋ちくしさいの家で、宵から鼻の下を長くして尺八を吹いていたんだそうで、人なんか殺す暇のなかったのは、二十人もの人が見張っています」

「で？」

「お夏が縛られそうになると、専次と二人で飛出してしまいました。縛られるくらいなら死んだ方がいいとか何とかで、気の進まない男を口説いて、永代まで来たところを、あつしに見付かったんで——」

ガラツ八は、ありつたけの聞込みをさらけ出して、耳の後ろをポリポリと掻きました。その大事な二人、心中仕損ねのお夏専次を逃がしてしまったのは、何としても面目が相立ちません。

これだけの説明を聴くうちに、平次と八五郎の足は、神田から日本橋へ、一気に駆け付けておりました。もう戌刻半（九時）過ぎでしようが、しもたや造りながら、店構えの大きい丸屋は、火の消えたような静寂のうちに、何となく不気味を押し潰したようなザワめきを孕^{はら}んでおります。

三

「八、あれがお夏とかいう娘じゃないか」

平次は丸屋の向う側、もう大戸を閉めた店先の隈^{くま}を指しました。

「あッ、有難え、死なずにいましたよ、親分」

八五郎は飛付くように、脅え切った娘の方へ進みます。その退路を絶つように平次。

「おどかすなよ、八、すっかり顫え^{ふる}上がっているようだ」
静かに娘の顔を差しのぞきます。

「何だつて親分の家の前から逃出したんだ、とんだ心配をしたぜ」
とガラツ八は、少し噛み付きそうです。

「済みません」

お夏の消えも入りたい風情を、平次はあわれに見やりました。
店先の隈を出ると、満面に青白い月を浴びて、十八娘の可愛らしさが、この上もなく効果的に見えるのでした。

「まあ、いいやな、久三郎兄^{あにい}哥の手を逃れてこの平次の手に捕ま

つちやたまるまいと思つたろう、——でも、ここへ戻つたのは感心だ。万事は俺が吞込んでいるから、一緒に入るがいい」

お夏は僅かにホツとした様子です。若さにも美しさにも似ぬ粗末な身扮みなりですが、全身から発散する魅力は、かえつて楚々として人を動かします。

「専次はどうした」

「一緒に来るというのを、——それではかえつて具合が悪いから、そこで別れました」

お夏の声はともすれば恐怖に絶えるのでした。

「それもよからう、さア、万事は俺に任せるんだぜ、解つたか」

「ハイ」

平次を先に、お夏を中に挟んで、ガラツ八しんがりが殿を勤め、丸屋の不安と疑懼ぎくとを包む空気の中へ入って行きました。

「御免よ」

「どなたで？ 今晩は取込みがございますが——」

番頭らしい実体じつていな四十男が顔を出しました。

「神田の平次だが——」

「あ、錢形の親分さん」

番頭は立ち辣すくみました。その後ろからヌツと顔を出したのは四十五六の小作りながら鋭い感じの男。

「何だ何だ、お、錢形の兄あにき哥じやないか。たいそう良い鼻だね」

青物町の久三郎です。平次の姿を見ると、競争意識が一ぺんに

ないこう
内 証して、サツと顔を曇らせるといった男です。

「そんなわけじゃねえ、——永代から身投げをしかけた娘があつたから、危ないところで止めて、送り届けて来たまでさ」

「えッ、その娘が、——あの、身投げをしたというのかい」

「何だか知らねえが、縛られるくらいなら身を投げて死んだ方がいいという料簡^{りようけん}だ。若い娘というものは、兄哥の前だが付合にくいね」

平次はさり気なく言いながらもこの事件に少なからぬ興味を持つている様子です。

「急に見えなくなるから、とんだ心配をしたぜ」

久三郎は照臭そうに、お夏の機嫌をとりました。

「ところで、修業のためだ。ちよいと現場を覗かしちや貰えまいか」

と平次。

「あ、いいとも、どうせ錢形の兄哥の智恵も借りなきやなるまい。殺しがあつてから、まる一日一と晩経つが、まるつきり眼鼻が付かねえ」

久三郎は少し苦い顔をしましたが、口前だけは器用に、平次の望みを容れいました。とんだ目違いで、お夏を狙ったばかりに、危うく娘一人を殺し損ねたのが、さすがに老巧な御用聞の氣を挫くじいたのでしょうか。

「お葬式とむらいはまだかい」

と平次。

「遠い親類があるそうで、明日もむつかしかろうと言うよ。お通夜の衆に遠慮して貰って、仏様を見るか」

「いや、それには及ぶまい。左貝殻骨の下から、胸まで突き刺す手際じゃ、娘の仕事でないことは判り切っているから」

久三郎はもう一度苦い顔をしました。奥の一と間に集まったお通夜の衆は、世間体を憚って、本当の近親ばかり、平次はその中に交って、百万遍の数珠じゆずを繰ったり、線香を上げたり、神妙らしい四半刻しはんとき（三十分）を過しました。それを吹き晒しの縁側から見ている信心気のないガラツ八の退屈さ――。

四

「ちよいと、親分さん」

「誰だい」

ガラツ八の八五郎は、好^いい心持に後ろを振り返りました。こんな調子で呼ばれるのは、あまり例のないことでもあり、それに、その声の仇^{あだ}つぽい美しさは、八五郎の五臓六腑に沁^しみ渡る心持だったのです。

「茂七さんは人なんか殺せる方じゃありません。どんな事を言っても、あの人ばかりは疑わないで下さいな」

「そりや一体どういうわけだい」

ガラツ八は闇を透かしました。外は美しい月夜ですが、そのせいで建物の蔭になる中庭の暗さは一倍です。

「頼みましたよ、親分さん、悪者は外から入って、お神さんかみを殺して逃げたに違いありません、——その証拠は——」

仇っぽい声はそれつきり尻切蜻蛉しりきれとんぼになりました。誰か不意にやって来た人影に驚かされた様子です。

「チエツ、勝手なことを言うぜ」

ガラツ八は大きい舌鼓を一つ、クルリと元の灯あかりの方へ顔を向けました。

「八、今のは誰だ」

「あ、親分」

いつの間にやら平次が、八五郎の後ろに立って、ニヤリとしていたのです。

「とんだ邪魔をしたようだな——たいそう仇っぽい声がしたが、あれは誰だい」

「それが解りませんよ、——何しろ中庭は真っ暗だ、——女には違うないが、新造しんぞうか、年増か、綺麗か醜いかの見当も付かねえ」
「何を言っただ」

「茂七は人を殺すような男じゃないから、疑われないようにしてくれと言うんで、——悪者は外から入ったに相違ないとも言いましたよ」

「すると下手人はやはりこの家の者かな」

平次は裏の裏を考えていました。

「とにかく、変な女ですね。あの声を聞くと、ぼんのくぼへあめ飴を垂らされるような、——鼻の頭を羽毛で撫でられるような、背筋がモゾモゾするような心持になりますよ」

それ以上は二人にも解りません。

青物町の久三郎を誘って、お米が殺されたという二階も見ましたが、階段が裏表にある上、部屋が並んで四つもある有様で、曲者にとっては四通八達しつうはったつの間取りです。

「これでは——」

平次もさすがに匙さじを投げました。

お米の刺された部屋は、畳の上の血潮もそのまま、何となく昨

夜の不気味な情景を思い起させます。

「八、ここへ一人ずつ呼んでくれないか、最初は一番怪しい茂七だ」

平次は久三郎の無言の承諾を得ると、早速錢形流の調べに取りかかります。

「へエ——」

八五郎は通夜の席から、そつと居候の茂七を呼出して来ました。
「親分さん、御用だそうで——」

平次と久三郎へ等分に挨拶したのは、三十前後の恰幅かつぶくの良い男、殺されたお米には遠縁に当るそうで、居候といつても、何となく寛闊かんかつな感じのする態度が、考えようでは横着らしくもあり

ます。

「お前と殺されたお神さんとは、どんな筋合になるんだ」

平次はこういった平凡なことから始めました。

「私の叔父の従弟いとこの、その嫁がお米さんで」

「さア解らない」

「まア、他人のようなものですよ」

「近頃、お神さんとの仲が面白くなかったそうだね」

「ヘエ、——まア、私も悪いには違いありませんが、あんまり困い

業んどうだから、ツイ、面白くないこともありました。昨日きのうも小遣が

かかり過ぎるからとさんざんの大小言で、二た言三言弁解いいわけをす

ると、今にも出て行け——と嵩かさにかかつて呶鳴どなり散らすじやあり

ませんか」

「それだけか」

「それだけかとおっしゃっても、私にとつちやそれだけじゃ済みません。三年越し店を手伝つて、奉公人並みに働きながら、一文も給金を貰つたことのない私が、たまたま齒磨きを使つたのが贅ぜいだとか、手拭を買つたのが生意氣だと言われちゃ、我慢がなり兼ねます。今晚すぐ出て行け——と言うのが、あんまり癪しゃくにさわるから、質で只ただみたいに取つた脇差のうちから、一番光るのを持出して、脅かしのつもりで二階へ登つて行くと——」

「……………」

茂七はさすがにゴクリと固唾かたずを吞みます。

「お神さんの部屋から飛出して、向うの裏梯子うらばしごの方へ行く者が
あります」

「男か、女か」

「それが判りません。何しろ江戸一番の締り屋で、二階廊下が危
ないのを承知の上で、どうしても有明ありあけを灯つけさせない人です」

「……………」

「何心なく部屋へ入ると、——驚いたことに、お神さんは、行あんど
灯んの前に俯向きうつむになって死んでいるじゃありませんか」

「どうして死んでいると解った」

「そこら中が血だらけで」

「着物へ吸い取られて、大した血ではなかったというが」

「でも、一と眼で解りましたよ、——あんまりびっくりして、思わず大きな声を出すと、番頭さんが飛んで来ました」

「それから」

「お咲さんも来たようです」

「誰だい、お咲さんというのは」

「番頭の和助さんのお神さんで、——もつとも年は少し上だそうですが」

「それから」

「下女や、小僧も飛んで来ました」

「お夏は？」

「見えなかったようです。もつともしばらく経ってから来ました」

が、何でも気分が悪くて、夕飯の後ですぐ寝てしまったそうで」

「それつきりか」

「へエ——」

茂七は何もかも言ってしまった安心さに、緊張のうちにほつとした様子です。

五

次は番頭の和助、四十男ですが、日蔭の冬とうがん瓜うりのように青白くて、せいぜい三十五六にしか見えません。妙に華きやしや奢しやで、滑らかで、金貸の番頭には不向きらしく見えますが、案外こんな人柄の

が、一番強^{したた}かな魂を持っているのでしよう。

お米の手足になつて、ずいぶん残酷な取立てをするという評判をとつた人間です。

「親分さん、御苦労様で」

「番頭さん、幾つだい」

平次は妙な事から訊き始めました。

「本年は前^{まえ}厄^{やく}でございます」

「たいそう若く見えるね」

「御冗談で」

「ところで、お神さんが殺された時は、何をしていたえ」

「階^{した}下に居りました。明日の取立てのことを考えていたところで」

「傍そばに誰も居なかつたのか」

「生あいにく憎誰も居りませんでした。こんな広い家ですから、六人や七人住んでいても滅多に顔を合せることもございません。それに亡くなった主人は、無駄な灯あかりを点けるのが大嫌いで、夜分などは空家のようにです。不自由といえ不自由ですが、どうせ抵当流れに取った家で、買手が付かないと、越すわけにも参りません、へエ——」

和助は支配人らしく、いろいろと気を配ったことを言います。

「番頭さんの給料は」

「通つて年に十両の約束でございました。が取立ての具合では少々の歩合もありました。もつとも女房がこの家へ住み込まして貰

つてからは、それが七両に減りましたが――」

「たいそう少ないようだが」

「へエ――」

「お前のお神さんは手伝っていたわけじゃないのか」

「お手伝いも致しましたが――」

女主人お米の徹底した吝りんしよく 嗇さく 振りはさすがに和助の口から言

い兼ねた様子です。

「主人のお米さんが死ねば、この身上は誰のものになるのだえ」

「お夏さんでございましょう」

「お前は？」

「私はお暇になるのを覚悟しております」

「すると、主人が殺されて困るのは、番頭さん一人ということになるね」

平次の質問は妙に皮肉な調子でした。

「いえ、私も少しばかり給金の前借りがございますし、——誠に申しにくいことですが、親分さんの方の手で知れると面倒ですから思い切つて申し上げますが、——お神さんには内緒で、少しばかり^{つか}費い込んだ金もございます」

「いくらだ」

「前借りは五十両ほど——私の五年の給料でございます。それに費い込んだのは、二三百両もございましょうか」

「あまり少しばかりではないぜ、番頭さん」

「へエ——、でも二十年も勤めて、七両や十両の給金では、私も世帯が持てません」

「フーム」

和助の真意は解りませんが、女主人お米を殺す動機だけは確かに持っていそうです。

その次に呼出したのは和助の女房のお咲、これは和助より三つ四つ年上なのと、すっかり世帯崩れの女房振りで、亭主とは十歳とおぐらい違いそうに見えます。十七八貫もあろうと思う、煮しめたふろふきのような水っぱい女。

「……………」

何にも言わずに、白い眼で平次と久三郎を見上げながら、小刻

みに貧乏揺ゆぎをしているのでした。

「お咲さんといったね」

「へエ——」

「お神さんの殺されたことで、何か気の付いたことはないかえ」

「何にもありませんよ、親分さん方」

男のような太い声です。

「和助にろくな給料を出さなかったそうだから、お前もお神さんうらを怨うらんでいたろうな」

「へエ——、でも締り屋で通った方ですから、三度の物にありつけば、我慢が出来ないこともありませんよ」

貧乏摺れのした女房らしい諦ていかん観かんです。

「お前も給料無しで働いたそうじゃないか」

「その代り、役得もありましたよ」

「はて？」

「お神さんからお金を借りたい人は、みんな私ども夫婦の御機嫌をとつたんですもの」

「なるほどな」

平次は妙な覚^{さと}りを開きました。

六

養い娘のお夏も、一応二階の部屋へ呼込まれましたが、これは

何を訊いても、最初は筋の通った事を一つも言いません。

「専次と一緒になるのを、どうしてもお神さんが聴かなかったそのうじやないか」

「……………」

「どうするつもりだったえ」

「この家を出るつもりでした」

僅かにあげた顔には、娘らしい純情が輝きます。こんなのが、^{わず}思い詰めたら、心中もするだろうし、人を殺す気になるかも知れません。

それにしても、不思議に人を牽^{ひきつ}付ける美しさでした。大して綺麗というわけではありませんが、——これは多分、娘の純情的な性

格からくる美しさかも知れません。

「お神さんが殺されていた時は、どこに居たんだ」

「少し気分が悪くて、横になっていました。階下^{した}の、私の部屋で

——」

「^{あかり}灯は？」

「^{つつ}点けません」

「専次のことで、もう一度相談するつもりで、二階へ行つたはずだが——」

「……………」

「先刻風呂場を覗いてみると、釜^{かま}の中に赤い鼻緒の草履が、少し燃え残つてあつたが、——その草履の裏に、何が付いていたか、

お前は知っていたはずだ」

「……………」

お夏は青くなりました。

「みんな言ってしまった方がいいよ、——お神さんを殺したのを、お前だとは決して思わない」

平次の言葉に、仰天したのは、お夏よりもかえって青物町の久三郎でした。それほどの証拠がありながら、お夏の無実を証明するような、平次の言葉が氣にくわなかったのです。

「では、みんな申します。——あの晩、私は専次さんのことをもう一度お母さんをお願いするつもりで、裏梯子をそつと登って、二階の部屋へ行きました。お母さんが許して下さらないと決れば、

その晩のうちに、専次さんと一緒にこの家を逃出して、木更津きさらぎの叔父さんのところへ行くはずだったのです」

「……………」

お夏の話は、思いも寄らぬものでした。

「部屋の障子を開けて、——私はよく声を出さなかったと思います。お母さんは脇差を背中に突っ立てたまま、行灯あんどんの前に俯向うつむきになっているじやありませんか」

「脇差はたしかに背中に立っていたね」

「え、ギラギラしてよく見えしました。——私はいんまりびっくりして、思わず飛込んで抱き起そうとしましたが、もうすっかり死んでいるのに気が付いて、怖すくくなって立ち竦すくむと、表梯子をミシ

リミシリと鳴らして、誰か登つて来た様子です」

「茂七だろう」

「誰だか解りませんが、——私も姿を見られては悪いと思つて、どうしてそんな氣になったか、今から考えると少しも解りませんが、——裏梯子からころ転げるように飛降りました」

「茂七が二階で騒いだのは、それからすぐか」

「いえ、私が自分の部屋へ歸つて、行灯に灯ひを入れて見ると、畳の上に血が付いていゝるではありませんか、うっかり血の付いた草履を履いたまま、飛込んだのです。——何を考えるいとま違もなく、雑巾でその畳と廊下を拭いて、草履を風呂場へ持つて行つて、まだ火の残つてゐる釜の中へ入れると、——その時二階から茂七さん

の声が聞えて来ました」

お夏の説明は次第に事件に明るさを添えて行きます。

「茂七は何と言った」

「大変だ、皆んな来てくれ、お神さんが殺されている——と言ったようでした」

「たいそう文句が多いようだが、間違いはあるまいね」
「え」

お夏は若い記憶力に自信を持っていそうです。

「もう一つ訊くが、その晩、専次が来なかったのか」

「来たかも知れませんが、あんまりびつくりして、合図を聞き漏らしてしまいました」

「合図は」

「口笛で——でも昨夜は、お隣に尺八の復習おさらいがありましたから、

口笛が紛れて聞えなかったのかも知れません」

「お前と専次の逢あいびき曳を、家の者は誰も知らないのか」

「知っていて知らん顔をしているのかもわかりません」

これがお夏から聴き出した全部ですが、事件の真相は、次第に解ってくるような気がします。お夏の言ったことを条件書にする
と、——

少なくとも、「死体には最初脇差を突き刺したままであったこと」、「その血刀を誰かが引抜いて、どこかへ隠してしまったこと」、「ちようどその時刻に、専次が来るはずであったこと」、

それから、「お夏と入れ違いに二階へ登った人間のあること」、「茂七がピカピカする脇差を持って、二階で騒ぎ出したのは、それからかなり経った後であること」——以上の通りになるわけです。

最後に下女と小僧を呼出して調べましたが、これは灯のない店とお勝手に居いねむ睡りして何にも知らず、ただ変ったことは、「お神さんは、来年は五十五だというのに、近頃は大変若造りで、そつと白おしろい粉を付けたら、髪を染めたり、思い切って派手なものを着るようになりましたよ」

これは下女の言葉です。六十の方へ近くなる老女の化粧が、女同士の下女に変な眼で見られるのはあまりにも当然のことでした。

「八、何刻なんどきだろう」

平次はフト顔を挙げました。どこかの鐘が鳴ります。

「亥刻半よつ（十一時）、いや子刻ここのつ（十二時）でしょうよ」

「夜中だな、が、岡っ引に時刻はない、もう一と働きしようか」

「一と働きでも二た働きでもやりますよ」

「それじゃ来い、夜の明ける前に片付けよう」

平次は月を踏んで飛出しました。続くガラツ八、青物町の久三郎、すっかり平次にリードされて、もう縄張も年の功も忘れてしまった様子です。

「どこへ？ 親分」

「丸屋で訊いちやまずいから、黙って飛出したが、専次の家はど

「こだか判らないが、自身番へつれて来てくれ」

「合点」

ガラツ八は飛びました。

七

それから間もなく、建具屋の専次は、八五郎に連れ出されて、真夜中の自身番に待っている、平次の前へ眠そうな顔を持って来ました。

「お前は専次か」

「へエ——」

挙げた顔、少し面喰らってブーツとしていますが、二十二三の色の浅黒い小意気な男で、江戸の町娘のお夏が夢中になりそうな型です。

「あの晩のことをみんな言ってしまえ」

平次は高飛車に極め付けました。

「へエ——」

「白ばつくれちやいけねえ。手前^{てめえ}が隠し立てすると、お夏の首に

縄が掛るぞ」

「……………」

平次に脅かされながらも、専次の首は深々と垂れるばかり、一言も物を言う様子はありません。

「八」

「へエ」

「耳を借せ」

平次は何やら八五郎の耳に囁くと、

「やってみましょう、待っていて下さい」

ガラッ八は獵犬のように飛出しました。

それからしばらく、平次と専次の睨み合いが続きます。

「どうだ、証拠を突付けられてからじゃ、手前の損だぞ、今のうちに、みんなブチまけたらどうだ」

「……………」

「俺は何かも知っている。尺八の復習から抜け出して、どこ

へ行つた」

「……………」

平次の答を空耳に聞いて、専次は一言の応えもありません。

「親分、あつた、これでしょう」

飛んで来たのは、ガラツ八でした。平次の手へ渡したのは、尺八を入れた鬱金木綿うこんもめんの袋。

「これだ、どれ、灯を貸してくれ」

行灯の側へ持つて行つて、紐ひもを解くと、中から出て来たのは、

籐とうを巻いた尺八が、一管。

「あッ、血？」

ガラツ八の驚いたのも無理はありません。尺八の籐に喰い込ん

で、微かすかながら斑はん々と残るのは紛れもなく古い血潮の痕あとだったのです。

「専次、これでも黙っている気か、血刀を誰の手から受取って、この袋の中へ隠した」

「……………」

「口笛を吹いて合図した時、お前に血刀を渡した者があるはずだ、——お夏ではあるまい。お夏が見た時は、刀は死骸に突っ立っていたはずだ。お夏はそれを抜いてお前に渡すはずはない、お夏がお前に血刀を渡したなら、下手人は間違いもなくお夏だが、血刀を渡したのが他の者なら、下手人はお夏でない」

平次の推理が手厳しいうちにも、専次を安心に導く様子でした。

「……………」

「俺は最初、下手人はお前かも知れないと思った。お夏が刀を隠したなら、お前が下手人だ」

「……………」

「お前が下手人なら、一度お米を刺しておいて、また刀を取りにあの家へ入るはずはない」

「……………」

「下手人は、お前でも、お夏でもない。これはみんなお前やお夏に疑いをかける細工だ」

平次の推理は次第に専次の頑固な心を動かして行きました。

「本当でしょうか、親分、お夏に疑いは掛らないでしょうか」

「大丈夫だ、俺が引受ける、この平次がお夏を引受ける、——血の付いた脇差をお前に渡したのは誰だ、言つてくれ」

「茂七ですよ、親分」

「何？」

「私が口笛の合図をすると、裏口へ茂七が出て来て、——お夏が間違いを起した、親殺しにされちや気の毒だから、この血刀をどこかへ隠してくれ、あとの始末は俺が引受けるから——と言つて、生血の付いた脇差を渡しました。あんまり驚いて口も利けなかつたので、そのまま尺八と一緒に袋へ入れて、しばらく皆んなの相手をして時を過し、そつと脱け出して脇差は江戸橋の下へ投り込み、尺八もよく洗つたつもりですが——」

「何だつて、その翌^{あく}る晩心中する氣になつたんだ」

と平次。

「お夏が縛られるかも知れないと言つて、私のところへ来たので、てつきり、下手人はお夏と思ひ込み、永代まで行つて飛込むつもりでしたが、八五郎親分に止められて——」

「その先は判つた」

平次はそこまで聴くと、専次を歸して物思ひに沈みます。

「親分、下手人は茂七に決つたじやありませんか、すぐ手を廻しましょう」

「いや」

平次は首を振ります。

「青物町の親分は、飛んで行きましたよ」

ガラツ八はこの手柄を、久三郎に横取りされるのが心外そうでした。

「放っておけ、——茂七が下手人なら、何だって、もう一本の新しい脇差なんか抜いて、死体のある部屋へ二度目に飛込んだんだ」

「誤魔化^{ごまか}した、親分、茂七の芝居じゃありませんか」

「いや、自分で殺しておいて、血刀を専次に隠させ、新しいピカピカする脇差を抜いて、もう一度死骸のある部屋へ入るのは、少し細工すぎると思わないか」

「……………」

「それに、あれは腹の良い男だ、和助と違って——」

「和助とどこが違っているんで？ 親分」

「もう一度丸屋へ行ってみよう」

平次はガラツ八を従えて、夜半過ぎの街を、丸屋へ引返しました。通夜があるにしても、家の中が宵とは比べものにならないほどザワめくのは、青物町の久三郎が、茂七を縛ったためでしょう。

八

「番頭さん、少し訊き残したことがあるが」

「へエ」

和助は恐る恐る平次に導かれて、人気のない部屋に入りました。

「他じゃない、番頭さんの配つれあい偶——お咲さんは確か、元立派な芸人だったはずだね」

「立派な芸人と申すほどじゃございませんが、若い時分に旅の女役者だったことがあります。三十過ぎで水仕事をするようになってからはあの通り女角力ずもうのように肥ってしまいましたが、あれでも若い時がありましたよ、へエ」

和助は苦笑いをするのでした。この男の華奢なのに比べて、お咲はまた、あまりにも醜く肥っております。

「もう一つ、これは少し言いくいことだが、番頭さんはこの一年ばかり、主人のお米さんに可愛がられすぎたようだね」

「……………」

和助は黙って俯向^{うつむ}いてしまいました。

「それを見張るつもりで、番頭さんの配^{つれあ}偶のお咲さんが、世帯を畳んでこの家へ入り込んで来たのだろう。主人のお米さんはそれが気に入らなくて、お咲さんをただコキ使った上、番頭さんの給金まで減らした、食い扶持を差引くつもりだったのだね」

「……………」

「返事がなければ、そう思って差支えはあるまい」

和助の萎^{しお}れる姿を見て、平次は立上がりります。

「親分、これからどうなるんで」

ガラッ八はぼんやりその後に従いました。

「これつきりさ——茂七に逢って、たった一言訊きさえすれば

いい」

平次は久三郎を追つてもう一度番所へ、曉^{あけ}近い街を行きました。
「錢形の、お蔭で下手人を縛つたよ。まだ白状はしないが、なアに、石を抱かせるほどのことはあるまい」

仮縄を掛けた茂七を引据えて、青物町の久三郎はこんな事を言うのです。

「青物町の、俺に一つ二つ訊かしてくれ、茂七でなきや知らないことがあるんだ」

「あ、いいとも」

久三郎の寛大さを可笑^{おか}しく見て、平次は茂七の側に寄りました。
「茂七、つまらない我慢は止^よした方がいいぜ、——お前はお夏を

庇^{かば}っているようだが、下手人はお夏なんかじゃないよ」

「……………」

平次の言葉を不思議そうに見上げる茂七です。

「あの晩、お前がお米にねじ込むつもりで二階へ行くと、お米の部屋から、飛出して来るお夏の後ろ姿を月明りで見たはずだ、——廊下に灯はないが、高窓から、月がよく射している——昨夜は月がよかった」

「……………」

「部屋に入ってみると、お米は殺されている、お前はてつきりお夏の仕業だと思った、——無理もない話さ。お前はお夏を庇ってやる気で、死骸の背中から刀を抜いて、どこかへ隠そうと思って

外へ出ると、専次がお夏と逢曳するつもりで、口笛で裏口から合図をした、——お前はその血刀を専次に隠させる気になった心持もよく解るよ——専次はお夏のためならどんな事でもする」

「……………」

茂七は始めて平次の顔を仰あおぎました。何やら疑惑が、その眼中に動きます。

「それから引返してお前は考えたはずだ。あの家の中で女主人のお米が殺されると、疑いは一番先に、その日大喧嘩をしたお前にかかってくる、その疑いを解くためには、下手人のお夏を引渡すか——それはお前に出来なかつた、お前は心の中で本当にお夏を可愛がつている、——無理もないよ、お夏は誰にでも可愛がられ

る娘だ」

「……………」

「が、自分で罪を引受ける気にもなれない、——思い付いたのはあの逆^{ぎやくて}手だ、大ナマクラのギラギラする脇差を持出し、二階へ登って大声を出した。その方がかえって疑われずに済むと思ったのだろう、——そう考えると、お夏が二階でお前に逢ってから、お前の騒ぐ声を聴くまで、かなり間があつたというのも解つてくる」

平次の説明は寸^{すんごう}毫^{すき}の隙もありません。

「下手人は、親分、本当の下手人は誰で？」

茂七は始めて口を開きました。救われた色が、活き活きとその

眼に新しい輝きを添えます。

「亭主とお米の仲を疑^{うたぐ}ったお咲だよ」

「えッ」

茂七よりも、ガラツ八と久三郎の方が、どんなに驚いたことでしよう。

「茂七を下手人にするのが気の毒になつて、芝居風な仇^{あだ}つぽい台^せ詞^{りふ}で、中庭の闇から八を口説いたのはあの女さ、あれでも昔は役者だ」

「……………」

「主人^{あるじ}のお米に怨みは山ほどあつたはずだ。亭主の和助の費^{つか}い込みは露見しかけていたし、自分は奉公人よりもひどくコキ使われ

て一文の給金も貰わなかった」

「……………」

「お米を刺した脇差はたぶん和助のだろう。拔身ぬきみを持出して、裏梯子から登り、お米の背後から一と思いに刺し、下へ降りたところへお夏が行ったのだ、——脇差の鞘が、たぶん和助の荷物か、あの女の荷物の中にあるだろう。それとも焼いてしまったかも知れない、土竈へつついと風呂場をもう一度捜すことだ、燃えさしぐらいはあるだろう」

「親分、夜の明けないうちに、行つてしよつ引きましよう」
ガラッハは立ち上がりました。

「いや、もう少し待つ方がいい、——あれ、丸屋の小僧が飛んで

来るじゃないか」

平次の指した暁あかつきの街を、小僧は前のめりになって飛んで来るのです。

「た、大変、お咲さんが」

「逃げたか、それとも死んだか」

「物置で頸くびを縊くくつて——」

「それでいい」

平次は深々とうなずきました。

「親分、知っていたんで？」

とガラツ八。

「知っていたわけじゃないが、俺が和助からいろいろの事を訊き

出すのを、あの女は襖ふすまの蔭で立ち聞きしていたよ。逃げられると少し困ると思ったが、——やはり根が悪人じゃなかったんだ」

平次は悲しそうでした。そう言う息は白々と見えて、次第に明ける冬の朝、——ガラッ八はぞつと襟をかき合せます。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（五）金の鯉」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第四卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1937（昭和12）年12月号

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2017年9月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

二本の脇差

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>